



平成24年の新しい年を迎えて

長崎県技術士会会長 山口 和登

新年明けましておめでとうございます。昨年5月の長崎県技術士会の総会において会長に選出され、早や8ヶ月を過ぎ、新しい年を迎えています。この間、会員名簿の作成配布、ホームページの適時更新、西日本技術士研究・業績発表年次大会の長崎での開催協力や長崎地盤研究会との複数回の共同勉強会、現場見学会（ジオラボ：長崎県技術士会後援）の開催、鹿児島県技術士会との意見交換会の開催、役員会の定期開催など出来ることから具体的に行動を行ってまいりました。この間、会員及び役員の方々には多大なるご協力、ご支援いただき大変感謝しております。ところで、昨年は多方面にわたって色んなことが起こりました。また、色んなことを考えさせられた1年でした。今年はどうのような1年になるか予測が出来ない年であることは間違いないようです。

昨年において予測が出来なかったことの一番大きな出来事が東日本大震災でしよう。大震災の発生、それに伴う大津波の発生、そして大災害の発生、原発事故の発生について予測が出来なかったことを俗に言う専門家や有識者といわれる人たちは「想定外」という言葉を当初は盛んに使用していました。想定外という言葉は科学的であるのか、また単なる言い訳言葉なのかははっきりしません。昔であったならば、最近ではあまり使われなくなった「天災」という言葉で大地震や大津波は語られたでしょう。専門家や有識者は天災と非科学的なことは言えないため、想定外と言ったにすぎないかもしれません。たしかに国語辞典によると天災は「自然によってもたらされる災害。地震・台風・落雷・洪水などの自然現象によって起こり、人為的に避けることが困難な災害。」とあり、科学的には対策の余地が少ないように思われます。それに対して想定外とは同じく国語辞典によると「事前に予想した範囲を超えていること。」とあり、事前に予測という点で、事前の対策の余地はあったが予想した範囲を超えていたと科学的なように思われますが、想定外と言った時点で天災と言っていることと何ら変わることがないように思われます。

私たち技術士も一般の人々から見れば専門家の部類に属することを考慮する必要があると思います。この為、各々の専門の分野に関しては上述した想定外という言葉の使用は極力避けたいものです。想定外という言葉には想定（検討）していたが、その想定とは違ったことが発生してしまったという意味の真に言い訳でしかない言葉の様に思われます。素直に勉強（知識）

不足、能力不足、経験不足であり、発生した事象を予測できませんでしたと認めることが、想定外の発生事象を学ぶこと（知識・経験）となり、その対策等を検討・実践することが次に活かせることとなります。この為、想定外という言葉で単に片つけてしまうことは何ら解決にならないと肝に銘じておく必要があると思われま。

問題が生じたり、災害が発生したりすると、一般の人は私たち専門家に対して具体的な意見や答えを求めてきます。この為、この事象は想定内であれば具体的な答えを（正しいか正しくないかは別として）出すことが可能です。想定外であってもその想定外とは意見を尋ねられた人自体の想定範囲外であって、もっと大きい目、多くの目、長い時間で見たり聞いたりしたならば、想定外でもなかったことが判明することが多々あります。個々人の知識、経験では想定外であっても多くを学び経験することにより、想定外が遠くになり、想定内が広がるのです。今は想定外であっても将来は一般常識として想定内に変化することは多々あると思われま。この為、想定外と言ってしまう前に多くの人に相談し、また勉強することにより想定外を極力少なくする努力が必要と思われま。私の専門とする地質現象について学生時代には解らないことがたくさんあり、特に現在では常識的でもあるプレートテクトニクス理論で解決できる現象も当時では一般的ではなく、先生に尋ねてもその現象は神のみぞ知るとか、違った解釈を教わったように思われま。しかし、想定外であっても時を経て知見を広めることにより想定内に変化することは多くあるように思われま。また、想定外と想定内を単純に2分するのではなく、想定内であっても想定外に近い想定内とか、想定外であっても想定内に近い想定外とかアナログ的な考え方が白黒はっきりしたデジタル的思考よりも時として現実的ではないかと考えま。

年の初めにあたり思い付きのままに述べさせてもらいました。しかし、私たち技術士は前述したように想定内を多くし、想定外を少なくする努力を怠らないようにすることが求められます。「人事を尽くして天命を待つ」とよく言いますが、はたしてできる限りのことをしたかどうかと自問し、後は静かに運命に任せるといった境地なりえただろうかと自問することも時として必要でしょう。このため、人事を尽くす手段の一つとして継続研鑽（CPD）が技術士の責務とされているわけです。長崎県技術士会としましては多くの会員に継続研鑽の機会・情報を提供することが会の存続・発展に繋がるものと信じて更に活動を活性化させ

たいと思います。具体的には5月の総会・研修会の開催、6月に会員名簿の作成・配布、1月、4月、7月、10月の機関紙 APREN だよりの発刊、長崎地盤研究会との共同勉強会の4月、6月、8月、12月の開催、11月の共同現場見学会の開催、長崎県技術士会の役員会の偶数月の開催（年6回）、その他 CPD 情報等の長崎県技術士会のホームページおよびメールによる開催予告、結果報告を実施いたします。以上のように多くの活性化策を計画しておりますので、会員各位の多くのご参加、ご協力、ご支援をお願い申し上げますとともに今年の皆様のご健康とご健勝を祈念しまして新年の御挨拶といたします。

年頭のご挨拶

公益社団法人日本技術士会九州本部 長崎地区代表幹事 大橋義美

新年明けましておめでとうございます。

会員の皆様には、ご家族ともども新しい年を迎えられたこととお喜び申し上げます。

昨年は3月11日の「東日本大震災」と「東京電力の福島第一原子力発電所の事故」など大変な年になりました。一日も早い復興を祈念いたします。

昨年の漢字一字に「絆」、「災」、「震」などの漢字が選ばれていますが、本年は確かな復興や元気で明るい社会を表現できる漢字が選ばれることを祈念するものです。私達技術士も「絆」を大事にして、社会に貢献出来るような活動が出来ることを祈っています。

原発事故では、「想定外」などの話がでていますが、社会インフラ等の整備を業務とする我々技術者として深く考えさせられるものがあります。社会の安心・安全のため信頼される技術者になることが重要です。そのためには、技術者として技術力の向上はもとより技術者倫理など資質の向上が大切です。

4月には、日本技術士会が「公益社団法人日本技術士会」として新しく発足しました。これにより九州支部が九州本部となり、今後は各県支部の編成へ向けての議論や支部の結成の動きが出てくるものと思われます。長崎県においても今後の議論と検討が必要になってきます。尚、現在の日本技術士会長崎地区の活動としては、技術士受験申込書配布や九州本部活動に対する協力などが主要な業務となっております。一方、「長崎県技術士会」は、県内技術士の組織として研修会などの諸活動を担っており県内での活動の中心です。

10月には「西日本技術士研究・業績発表年次大会」が開催され、皆様のご協力により成功裡に実施出来たことに感謝申し上げます。長崎地区で初めての開催でしたが準備から終了まで関係者には大変お世話様になりました。

大会では、三菱重工長崎造船所の史料館、女神大橋、香焼造船所の見学やグラバー園での交流会など参

加者に好評でした。特に100万トンドックを有する造船所の見学は日頃見学出来ない工場のため初めての方にとっては興味をもって頂いたと考えます。

発表大会は、長崎ブリックホール国際会議室で開催され多く技術士の方に参加していただきました。感謝申し上げます。

ところで、長崎県内の技術士・補の皆様が「長崎県技術士会」と合わせて「公益法人日本技術士会」に入会いただき、夫々の立場で研鑽を積み、夫々の立場で活躍いただくことを祈念しております。

平成24年は、日本技術士会主催の各種研修会などが開催されます。多くの技術士の皆様に参加されることをお願いいたします。

会の諸活動については、「公益社団法人日本技術士会九州本部」や「長崎県技術士会」のホームページを閲覧し活用・活動していただきたいと思います。

最後になりますが、会員の皆様のご健康とご多幸を祈念いたしますと共に、会の活動に対するご協力を宜しくお願い申し上げます。

機関紙発行担当者より

明けましておめでとうございます。今年も引き続き宜しくお願いいたします。

昨年は東日本大震災という未曾有の大災害が発生し、津波などによる自然のもつエネルギーの巨大さを改めて認識させられるとともに、また福島第一原発事故という我が国の最先端技術分野で発生した重大事故を受け、私たち科学技術分野に身をおく者にとって技術のあり方を含めて色々考えさせられる機会となりました。特に自然災害においては「災害は忘れた頃にやってくる」とよく言われますが、我が長崎県においても諫早大水害や長崎大水害を経験し、今また「過去の災害に学び、その経験を次の世代に伝承する」ことの重要性を改めて感じました。

本年も震災・原発事故からの本格的な復旧・復興に向けて厳しい一年となると思いますが、今こそ技術士として科学技術に関する高等の専門的応用能力が試される時だと思えます。お互い切磋琢磨してがんばりましょう。

最後になりましたが、本年も1, 4, 7, 10月発行予定の当機関誌のほか、同様に年4回発行予定の日本技術士会九州本部の「技術士だより・九州」等の発行に際して、会員の皆様に多々原稿をお願いすることになるかと思いますが、合わせてご協力宜しくお願いいたします。

大栄開発(株) 桐原 敏

〒857-1151 佐世保市日宇町 2690 番地

TEL : 0956-31-9358、FAX:0956-32-2711

E-mail : s.kirihara@daieikaihatsu.co.jp